

---

ここは入口

リン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここは入口

### 【コード】

N5026V

### 【作者名】

リン

### 【あらすじ】

入口へようこそ。私は貴方を歓迎しよう。どこへの入口なのかはすぐにわかる。名乗る必要はない。さあ、耳を傾けてみて欲しい。

(前書き)

夏のホラー2011参加作品です。他に二作品ありますので、あ  
らすじや文字数から読みやすいものを選び下さいます。ご興味を  
頂ければ、他の二作にもぜひお越し下さい。

ハッピーエンド、バッドエンドともに用意しておりますが、この  
作品がどちらなのかはここでは申しません。お楽しみ頂ければ幸い  
です。

私の言葉が理解できる者を歓迎する。ようこそ。

ここに一人の男がいる。この際、名はどうでも良いが、人間に与えられる【名】には想いが込められているとも言う。貴方には伝えておこうか。この男の名は、荒木啓一。込められた意味など、私は知らぬ。貴方への情報として活用するだけなのだから。

荒木は不幸な男だ。何が幸福で何が不幸なのか、私は知らぬ。本人がそう言っているのだから、不幸な男だ。最近では、幸福ということについて考え続け、周囲には誰もいないにも関わらず、考えが口から出ることもあるようだ。貴方にも聞こえるように尽力致そうか。

「どいつもこいつも……わかってねえ。お前らの不幸なんてメジヤねえってのに、自分が一番不幸だってツラしやがって。そんなのが一番の不幸だってなら、俺が代わってやりたいぜ」

ほう。面白そうなことを言い出した。

いかがかな。荒木の声は貴方に届いているか？ 私は荒木の考えに付き合うことにする。貴方にも面白いものが見えるかも知れない。しばらく付き合ってみるのも悪くないはずだ。

さて、荒木を他の不幸な環境に置いてやろうと思う。荒木が幸福を掴むのかどうか、見てみるとしよう。

「どいつもこいつも……わかってねえ。お前らの不幸なんてメジヤねえってのに、自分が一番不幸だってツラしやがって。そんなのが一番の不幸だってなら、俺が代わってやりたいぜ」

同じことを言っているようだが、境遇は全くちがう。荒木が『メジヤねえ』と言っていた者の中から選んだ一人と同じ境遇に置いてやったのだが……ふむ。荒木はやはり不幸なようだ。別の者と同じ

環境に代えてやろう。

「どいつもこいつも……わかってねえ。お前らの不幸なんてメジやねえつてのに、自分が一番不幸だつてツラしやがって。そんなのが一番の不幸だつてなら、俺が代わってやりたいぜ」

なるほど。私の思い違いか。荒木は最も不幸な目に遭っているのではない。荒木そのものが最も不幸なのだ。どんな目に遭おうと、荒木が最も不幸な男なのは間違いないのかも知れない。

「ちくしょう……俺にも、金さえあれば……」

金か。それを望む人間は多いようだが、それほど価値のあるものなのか。試してみようか。

さて、荒木を金の有り余っている環境に置いてやろうと思う。

「結局、どいつもこいつも金目当てか。本気で俺と接しているヤツなんていやしねえ。部下という駒とビジネスとしての女がいるだけだ。何で誰も俺に本気で向き合ってくれねえんだよ」

荒木は金の使い方がわかっていないのか、金があっても結局不幸な男のようだな。

「ちくしょう……友達や恋人さえいれば、金なんていらねえのに……！」

贅沢な男だ。友達や恋人のいる環境に置いてやれば、また、金さえあればと言い出すのだろう。どちらもある環境ならば文句はないのか？ ふむ。試してみようか。

さて、荒木を友達も恋人も金もある環境に置いてやろうと思う。

「あー、退屈だ。何でこう毎日退屈なんだ。手に入らねえものなんかねえし、周りもいいヤツばっかだし。刺激がねえんだよな、刺激が。毎日生きるのが大変な家にも生まれたかったぜ」

そうか。段々わかってきたぞ。貴方はわかつているかも知れないが、どうやら荒木は、あるものは全て当たり前で、ないものが欲し

いようだ。自分の手にはないものを求める。そして、手にしたらもう、それは当たり前前に荒木の一部なのだ。何を手にしようと、そこから相対的にないものを探し、それを求める。そして、それがないことが不幸なのだ。つまり、どうしても不幸だということなのか。

荒木を幸せにはできないのか。せつかくだから、私としては荒木を幸福な男にしてやりたいものなのだが……そうか。『相対的にないもの』を探すから不幸なのだ。逆に、何もないところで『相対的にあるもの』を探せば幸福になるはずだ。ふふふ。面白くなってきた。

さて、荒木を金も仲間もない環境においてやろうと思う。最初？ 元々は金も仲間も平均的にあった。繰り返すが、『何が幸福で何が不幸なのか、私は知らぬ』。荒木自身が不幸だと言っていたからそう判断しただけだ。貴方が幸福なのか不幸なのかも、貴方が決めるのだろう。荒木は不幸なのだ。

「へっ、へへへ。こんなに簡単だとはな。食い物はとりあえず盗ったから、次は金も盗んでやるか。その後は女でも襲って……へへ。働く必要なんてねえ。こんなに楽に好きなことができるなんて、俺はなんて幸せなんだ」

ようやく、荒木は不幸な男ではなくなったか。しかし、せつかくだから、もっと幸せにしてやりたいものだ。今以上に何もないとこるへ移してやるとしようか。

さて、荒木を音も光もない空間に置いてやろうと思う。

聞こえないから喋ることもできない。荒木の声が聞こえないのはそのせいだ。貴方には見えないか？ では、私が伝えよう。荒木は這いつくばって草を食べている。実をつけたものを口にすると、笑顔になっている。雨が降ってくると、仰向けになり口を開く。『俺はなんて幸せなんだ』と口にした時と同じ表情だ。荒木の考えに付き合った甲斐があるというものだ。くくく。

さて、荒木の命も無くしてみようか。荒木が最高の幸福を得るために。

何か言いたそうに見えるな。こう見えても私は忙しい。遊びながら働くのは大変なのだ。しかし、せっかくだから、貴方に応えよう。

ふむ。私は何者なのか？ この際、名はどうでも良いが、人間に与えられる【名】には想いが込められているとも言つ。貴方には伝えておこうか。私の名は死神。込められた意味など、私は知らぬ。くくく。

私の仕事？ 命を司ることだ。貴方にわかりやすく言つのなら、私の言葉を理解できる者に私の存在を伝え、不要な命を削り取るということになる訳だ。荒木はなかなか愉しませてくれた。これだから遊ぶのはやめられない。命を削り取る前には、せっかくだから望みでも叶えてやりたくなるものだ。せっかくだから、な。くくく。いかがか。私の声は貴方に届いているか？ くくく。

後ろを向いても私はいない。ふふふ。そんなに周囲に気を配らなくとも、心配ない。そんなところに私はいない。ちゃんと私は貴方の中にいるぞ。くくく。

さあ、私は名乗った。貴方の名も聞かせてもらおう。仕事の相手なのだ。仲良くしようじゃないか。恐れることはない。込められた意味など要らぬ。貴方の名は次の者への情報として活用するだけなのだから。くくく。

あまり手間をかけさせないで欲しい。こう見えても私は忙しい。遊ぶ時間がなくなってしまう。

さあ、幸せにしてやろう。くくく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5026v/>

---

ここは入口

2011年8月8日17時09分発行